



## 年間第 27 主日 (ルカ 17:5-10)

あなたにもいつか本物の信仰が必要になる

三年前の説教を土台にしています。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」(17・6) からし種にたとえられた信仰を掘り下げてみましょう。私たちにも、あっと驚く行動を起こさせる「からし種一粒ほどの信仰」があるでしょうか。私たち皆が「からし種一粒ほどの信仰」を見つけて帰ることが、今週の課題だと言えます。

古い話ですが、私の父が生きている頃、刺身を食べるのに、唐辛子の種を箸でこさぎ、醤油に落として食べていました。小学生だった私に「食べてみるか」と勧められて刺身を食べると、あまりの辛さに魚を口から出すほどでした。父がそれを見て笑っていた、そんな記憶があります。

それから何年かして父は船で指を機械に巻かれ、障害が残ったので船を降りて牛を飼い始めました。牛は藁を食べると当然フンをします。そのフンを乾かし、袋詰めにして販売していました。袋詰めは、中学生の頃から私も手伝いました。ただすべてのフンを処理したわけではなく、一部は場所を決めて捨てていたのです。

その、フンを捨てる場所のそばに、唐辛子が植えられていました。山を開墾して作った牛の放牧場のそばは畑だったので、唐辛子も植えられていたのでしょう。残り物のフンを捨てるそばにあった唐辛子は、いつの間にかピーマンのように育っていました。ある時興味半分で、私はそのピーマンの大きさの唐辛子をちぎって、食べてみたのです。

唐辛子が、ピーマンになれるはずがありません。食べたら火の出るような辛さでした。誰も見たことのない大きな唐辛子。唐辛子がピーマンのように育つことに、素直に驚いたのです。あっと驚く成長、誰も見たことのない巨大な実が、父の亡くなった今でも牛小屋のそばで見かけます。

さて福音朗読、使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」(17・5)と願いました。私たちは腕を磨いたり技術を向上させたりという経験を皆持っていますが、使徒たちが考えていた「信仰を増してもらおう」ということも、何か経験の積み上げやより大きな信仰を足してもらおうような感覚だったかも知れません。

しかしイエスは、真の信仰は小さなからし種に示されると言います。家庭で使う練りからしの中に、ほんの少し種が残してあるチューブがあるのを皆さんご存知でしょう。聖書のからし種もあの粒をイメージしてよいと思います。あの小さな種に、イエスの考える信仰は示されるというのです。

私たちはどうかすると、大きい力があれば大きいことが成し遂げられると思いがちです。けれども他方で、小さな力が大きな事を

成し遂げることも知っています。車のタイヤをパンクさせるのはタイヤを半分に切ったからではなくて釘一本が開ける小さな穴です。仰向けになっている人の動きを制するのに大げさな道具は必要ありません。指一本でおでこを抑えるだけで、どんな大男でも押さえつけることができるのです。「からし種一粒ほどの信仰」とはそういうことでしょう。

私はたまにピーマンやパプリカを見ると、「これはひょっとしたら唐辛子なのではないか？」と思うことがあります。実際にはあり得ないことです。あり得ないことですが、私は学生時代にそのあり得ないことを見たわけです。

「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば」イエスが言われるこの「もし、あれば」と言っているのは、「あなたたちの信仰が本物であれば」とか、「あなたたちの信仰が本当に神から与えられたものであれば」そういう意味ではないでしょうか。

もし私たちの持ち合わせている信仰が本物であれば、神から与えられたものであれば、闇の中でも光を見つけ出し、絶望の中でも希望を見つけ出します。暗闇の中で光を見つけ出す信仰は、真っ暗な夜空に見える星のようにごくわずかの光です。しかしそれは、手探りで生きている人生にあっても失うことのない確かな道しるべです。

また絶望の中で見つけ出す信仰は、あらゆるものを打ち壊すシヨベルカーのような信仰ではありません。折れかけた水草を支え続け、今にも消えそうな灯心を消さない、微かなのだけれども確実なよりどころなのです。小さな持ち物だけれども、闇に光を見だし、絶望の中で希望を拾う。それこそが「からし種一粒ほどの信仰」なのでしょう。

みなさんそれぞれ、信じていたものをたたき壊され、何も信じられなくなる時を味わったことがあるでしょう。この世のものが何も信じられないのは確かですが、それでも人が死の淵から生きて戻ってくるのは、神がこの世で与えてくださる「からし種一粒ほどの信仰」なのです。「信仰は二の次で、まずはこの世の生活だ」そんな思い違いから抜け出せた時、私たちは本物の信仰に出会うのだと思います。